

地域と学校の 「協働」の土壌は どのようにして 育まれたのか？

島根県の益田市では、次世代育成を「ひとつくり」と捉え、多様な大人との対話や協働を通して地域全体で子どもたちを育む「ライフキャリア教育」を10年前から実践しています。地域と学校の協働が日常となっている背景や取組について、関わる各方面の担当者の方々にお集まりいただき座談会を開催しました。

廣田理史先生
島根県立益田高校

益田市内の進学校でSSH担当。地域連携を急伸させている。

檜垣賢一さん
一般社団法人
豊かな暮らしラボトリー
(略称：ユタラボ)
代表理事

中間支援団体として取組開始時から地域と学校、生徒をつなぐ活動に従事。

石川有里さん
益田市西益田公民館
公民館主事

子どもと大人をつなぐ地域連携の要となっている公民館の、生徒たちの相談役。

中島尚子先生
島根県立益田翔陽高校
総合学科科長

課題研究(探究活動)で地域連携を必須とし生徒と地域をつないでいる。

三宅康将先生
島根県立益田養護学校
地域連携セクション

学校運営協議会をフル活用し、卒業後も生徒が生き抜く力をつける羅針盤を作成中。

桐 雅幸さん
益田市教育委員会
ひとつくり推進課
社会教育主事

市の「ライフキャリア教育」を推進し、子どもも大人も輝くまちづくりを進行中。



幼児期から青年期まで、学校と地域の 多様なプレイヤーが縦横に連携

「自分はどうありたいか」を 職業以外の大人の姿から学ぶ

島根県の西端に位置する益田市。合計特殊出生率は国や県の平均よりも高く推移しているものの、進学や就職による青年層の人口流出や、少子高齢化による人口減少が長年の課題となっていた。高度経済成長期から「過疎」発祥の地と言われてきたこともあり、島根県の取組である「ふるさと教育」や職業観を育成するキャリア教育に力を入れてきたが、青年層の人口流出に歯止めはかからなかった。

こうした背景から、2015年の「益田市総合戦略」において、人口減少問題の克服と持続的な発展に向け、幅広く将来の地域を担う人材の育成＝「ひとづくり」を目指し、改めて「益田市ひとづくり協働構想」を策定。「ひとが育ち 輝くまち 益田」をまちの将来像に掲げ、市政全体でひとづくりに取り組み始めた。

市の教育委員会では、従来のキャリア教育が、職業観に偏重した「ワークキャリア教育」であったことが、生徒たちが都会志向になり市外への流出の一端を担ってしまったの

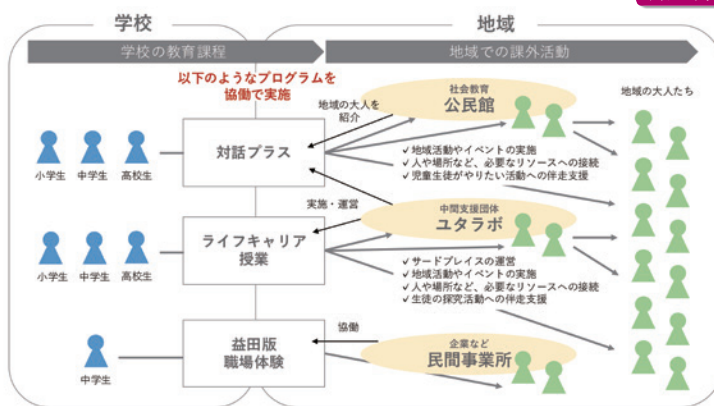
ではないかと考えた。また、地域についての「ひと・もの・こと」を「知る」ことに留まっていたふるさと教育に対して、地域の人々との出会い、つながり、対話し、協働することで子どもたちの人生観を育む地域教育を目指すこととした。職業人として以外の余暇や家族人としての顔ももつ地域の大人たちの姿に触れ、「自分はどう生きたいか？ どうありたいか？」を考える「ライフキャリア教育」へと舵を切った。

10年間の継続で、若者の 地域への意識が確実に変化

益田市の「ライフキャリア教育」の特徴の一つは、学校教育課程のなかで生徒全員が受けるプログラムにおいて、地域の大人と語り合う場を設定していることだ。学校と地域の接続には、地域の公民館や、「豊かな暮らしラボラトリー（以下、ユタラボ）」という中間支援団体など外部の支援を受けることで、幅広い地域の人々につながる横展開が可能になっている（図1）。

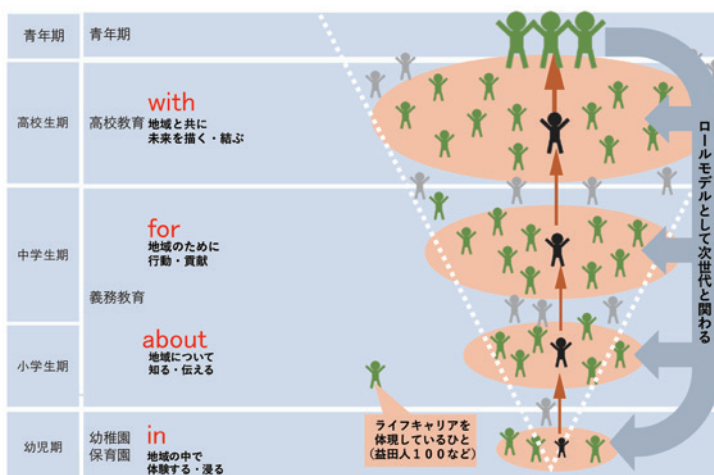
もう一つの特徴は、幼児期から青年期まで成長段階に合わせた取組を行い、地域との関わりを段階的に広げていきながら、生徒自身が下の世代のロールモデルとなっていく

図1 学校のプログラムを地域資源が支える



出典：林知里「地域における学びと当事者性の育成ー島根県益田市の『ライフキャリア教育』に見る、高校生の姿に着目してー」2024

図2 発達段階ごとの活動を通し、次世代のロールモデルに



「益田市の未来を担うひとりづくり計画」より

縦展開の循環を構築していることだ(図2)。

縦横のプログラムで地域の大人や支援組織との連携をきっかけに、公民館やユタラボの伴走支援を受けながら、生徒たちは学校教育課程以外でも個人的な地域での探究活動や、地域活動に参加し始める。「ひとづくり」を共通の上位概念に、家庭や学校外の大人たちが子どもたちを引き受け、地域全体で子どもたち

を育てていく環境が創られている。10年間取組を続けてきたことで、一度まちを出た若者が戻ってくるなどの成果が見え始めている。

異なる立場同士で施策を進め、継続してきた秘訣や、それぞれの立場での思い、生徒や地域の人々の変化について、「ライフキャリア教育」を支え、実施している多方面の関係者の方々にお集まりいただき、語り合ってもらった。

ダウンロード可

※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 刊行物 >> キャリアガイダンス (Vol.456)

地域連携の目的は？

——益田市の「ライフキャリア教育」の中心的プログラムが「対話プラス(旧称・益田版カタリ場)」(30ページコラム参照)とのことですが、対話を重視した背景にはどんなことがあったのでしょうか？

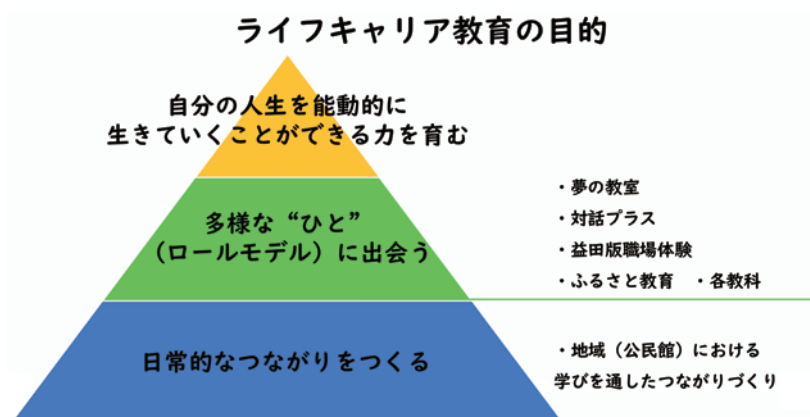
桐(教育委員会) 益田の子どもたちはもともと地域の人にはきちんと挨拶しているし、都会の子どもに比べたら圧倒的に話していると大人は思っていたのです。ところが、2018年に益田版カタリ場の事前アンケートを実施したところ、「地域の大人と話す機会がよくある」という問いに対し、61%の中高生が「そう思わない」と回答し、衝撃を受けたのです。

檜垣(ユタラボ) こうした地域課題に取り組もうとしたときに、当時の教育委員会の社会

教育課の課長が「市の中だけで考えたら、発想が限定的になってしまうだろう」と、外部の専門的な力を求め、島根県教育庁の教育魅力化特命官だった岩本 悠氏やNPO法人カタリバ代表の今村久美氏などに声をかけ、支援を仰いだのがスタートでした。外部の有識者にも入っていただいた「益田市の未来を担うひとづくり計画策定委員」で、**既存のキャリア教育やふるさと教育では、同じ成果しか出ないので、もっと人と出会うような取組が必要**という方向性になり、そのときに出てきたのが「ライフキャリア教育」という考え方だったのです。

桐 益田市のライフキャリア教育の最終目標は「自分の人生を能動的に生きていくことができる力を育む」こと(図3)。そのためにはどん

図3 益田市のライフキャリア教育の目的



な仕事がしたいだけでなく、どうありたいか、どう生きていきたいかという、**職業人として以外の「今を生きる」大人の生き方に触れることが重要**と考えました。そのために、地域のさまざまな大人とつながりをつくり、話を聞き、大人と子どもが協働する場を設けることになり、すべての小中高生が受ける中心プログラムとして「対話プラス」が始まりました。

石川（公民館） 4万人余りの小さな市でのライフキャリア教育には、地域の大人全体の力が必要です。そこで、**大人も自主的に地域活動に参加する場として、公民館の位置づけが再定義されました。**それまで公民館は趣味で何かやりたい人が集うような場所で「ひとづくり」という意識はまったくありませんでした。そこに「つろうて（「みんなで集う」という方言）子育て協議会」という地域の任意団体を立ち上げて子どもに関わったり、「どんどん地域の人を巻き込め」と言われたりして、公民館の活動がガラッと変わりました。

檜垣 今では公民館がライフキャリア教育の要の場となっています。

——高校現場や高校生が実践しているライフ



キャリア教育の取組について教えてください。

桐 本来、市の管轄は中学校までですが、市内に高校が4校と高等部を含む養護学校1校があるのでユタラボさんに間に入ってもらい「益田市未来の担い手の育成コンソーシアム」という協議会に高校にも参加してもらいました。**「対話プラス」は小中高では授業の一環として取り組んでもらっており、ほぼすべての生徒が参加しています。**高校生は地域の大人と語り合う一方で、高校生自身が語り手として、これまでの自分の成長を振り返り、小学生に語るために自主参加しています。少し年上の先輩と話すことで小学生が中高になった自分をイメージでき、ロールモデルが循環する流れが出てきています。



桐さん

知識偏重の地域教育から、
今を生きる大人と出会い、
つながるライフキャリア教育へ。

／ 高校におけるライフキャリア教育① ／

対話プラス

「対話プラス」は、1対1の対話を通じて「これまでの人生、今の自分、そしてこれからどんな人でありたいか」という自分自身の生き方について考えることで、自分の「心に火を灯す」授業。対話の対象は、小学生×高校生、中学生×地域の大人、高校生×益田の大人。高校生は大人と語る場と、小学生にとってのロールモデルとして語る場の両方の機会がある。運営と進行はユタラボが担当し、市内のほぼすべての小中高校で実施されている。語り合う内容そのものよりも、本気で向き合ってくれる大人の存在や、自分は一人ではないと思える機会の創出を重視している。



檜垣 ユタラボの活動としては、各校の総合的な探究の時間や課題研究などで地域と学校をつないでいます。学校活動外では「高校生を中心としたサードプレイスなど、中高生がふらっと寄れて、自分たちのやりたいイベントなどを企画できる居場所の運営を市からの委託を受けて行っています。益田の高校生はこの10年間の取組で、中学校までに「何もないところから何かを創る」ことを経験しています。「益田は過疎で何もない」と最初は言うのですが、「ないからこそ自分たちで創ろう」と働きかけると、子どもたちはいろんなイベントなどをやり始めます。ないからこそ創る喜びを経験しているので、高校生になっても学校を介さずに「あれやろう、これやろう」と自発的に取り組んでいます。

石川 それは私が言いたかった(笑)。私たちの住む西益田は高校がないのですが、中学校までに子どもたちは公民館をフル活用しています。高校生になったときに学校の授業ではないところで「地域のイベントの実行委員になりたい」など、公民館との関わりを求めてくる生徒さんが出てきています。

地域とつながった学びで、
将来地域に貢献できる
生徒を育てる。



中島先生

学校と地域をどう結ぶか？

——今日は益田市内にある県立高校と県立養護学校の先生にもお集まりいただいています。各校の現場での地域連携の取組について教えていただけますか？

中島（益田翔陽高校） 益田翔陽高校（以下、翔陽）は電子機械科、電気科、生物環境工学科、総合学科という4つの科を持つ複合型専門高校で、私は総合学科を担当しています。総合学科の科目「産業社会と人間」や課題研究で、地域に生徒たちが出て行っています。

課題研究や地域連携は生徒も教員も大変です。生徒のためになるのか実は最初は懐疑的でした。しかし、自分自身が育休中に、子育てする人を迎え入れてくれる地域の人々の存在や取組が多々あることに気づいたのです。子どもが芸術に触れて遊べる隣の市の施設を長年利用していて、家庭科教員と

して益田市でもそれと同じようなことを生徒と一緒に学校活動としてできるのではと考えました。「保育履修者が家庭科で学んだことを地域で実際に還元できる取組としてやってみたい」とユタラボさんや地域の人に相談すると、協力してくれる人が次々に出てくることに驚きました。しかも一度つながると関係が深く広がっていくのです。市の10年間の取組について今日の桐さんたちのお話で初めて知ったので、そういうことか、と腹落ちしました。

檜垣 翔陽は開校以来、PDCAをきちんと回して地に足がついた探究をしていらっやいます。中島先生がいらしてから「地域連携するよ!」と旗を振ってくれているので、さらに生徒が実践的な経験を積むことができ、探究の深度を深めていると思います。進路の際に地域での体験を自分の言葉で語れる生徒が多く、就職や進学 of 総合型選抜で良い



三宅先生

学校運営協議会をフル活用して、
養護学校と地域との
良好な関係構築を再整備。

結果も出てきていますよね。

中島 1年生の「産業社会と人間」や2年生の専門科目の授業などで地域の大人とのつながりをたくさん体験しているので、3年生の探究活動では生徒たちが主体的に動いています。生徒が成長して自発的に動けるようになると、地域連携での教員の負担も軽くなると感じています。

廣田(益田高校) 益田高校(以下、益高)の探究活動は、翔陽ほど地域連携はまだできていないと思います。ただ、**従来一般選抜**でいわゆる上位大学受験が当たり前だった空気が、**高校時代の体験を活かした総合型選抜**を選ぶ生徒も出てきて、ここ数年で変わりつつあります。

檜垣 外から見ると、今、地域で一番変化しているのが益高なのです。先ほどの石川さんのお話のように、中学時代までに学校外の公民館やサードプレイスで地域活動をしている生徒が高校生になっても続けているケースが益高生でも増え始め、彼らが島根大学のへるん入試などの総合型選抜で進学し始めています。

廣田 生徒たちの学外の活動を教員は把握しきれていないのですが、ユタラボさんから「益高の生徒さんがこういう活動に来ていましたよ」と教えてもらったり、進路面談で生徒から「地域活動を題材に総合型選抜で進学したい」と言われて初めて知ったりすることもあります。時代の流れもありますし、生徒た

高校におけるライフキャリア教育②

ライフキャリア授業

27ページの図1・2のように幼児期から中学校までのライフキャリア教育プログラムで積み重ねてきた経験と成長を基に、高校では実践的に社会と結びつき、自分の進路目標や生き方を考えていくプログラムを行っている。ユタラボや公民館の支援によって総合的な探究の時間や課題研究などで実際に地域に出て行き、地域社会における課題解決や挑戦を通じて「社会の一員としての自分」を試してみること、生徒自身がより能動的な生き方や進路目標をもつことへつなげている。(写真は益田市が認定された日本遺産を高校生の視点でガイドをしている探究活動の様子)



ちの変化に若手教員が刺激を受け、教員側も総合型選抜に肯定的になってきています。

桐 教員の変化は高校だけでなく中学校でも起きていますね。「対話プラス」などで外部の人が相手だと、生徒たちが自分のことを一生懸命に語る姿を見て、地域と関わっていくことの効果を先生方が感じて地域連携を広げていったりしています。中学生たちは総合

的な学習の時間で公民館に出かけて行って地域の方々とつながってプロジェクトを進めています。それが楽しくて授業以外でも休日に公民館に行って個人的な探究をしている子もいるのです。その中学時代に学校内外で積み上げた地域との連携が、しっかりと高校の探究活動につながるようにすることが、これからの課題と感じています。

——三宅先生の益田養護学校の地域連携は、翔陽や益高とは異なるつながりになるのでしょうか？

三宅(益田養護学校) 益田養護学校(以下、益養)は小中高を包括していて、私は高等部の教員で地域連携セクションを担当しています。高等部の生徒は卒業後にほぼ100%地元で就職しますので、地域は生徒たちにとって生きていく場所。地域との関わりは本来欠かせないもので、学校が創立した25年前は地域活動は非常に活発でしたが、経年で地域連携が形骸化してしまい、一時途切れていた地域連携セクションが4年前に復活しました。しかし、具体的にこれからの地域とのつながりをどうしたらよいか悩み、学校運営協議会に助けを求めたのです。

檜垣 私や石川さんも益養の学校運営協議会(以下、協議会)に入っていますが、**三宅先生は協議会を形骸化させず、「助けてほしい」と我々をフル活用してくれます。**

三宅 学校にいと自分たちの立ち位置も他校の取組もわからないので、協議会の方々の

情報や客観的な視点は非常に重要なのです。

石川 協議会で益養が育てたい生徒像を直接聞いたことで、地域で生きていく卒業生たちを地域のどこにつなげばいいかが明確になり、協力しやすくなりましたね。

檜垣 益養では生徒が作る製品の販売や地域のイベントのお手伝いなどは以前からやっていました。従来の地域連携は地域「貢献」と捉えられることも少なくありませんでした。ですが、学校運営協議会の働きかけもあり、ここ数年で、さまざまな取組が、地域にとっても学校にとってもWin-Winで、かつ持続可能なものなのかが議論されるようになりました。

三宅 学校は生徒が卒業するまでにつける力しか考えていませんでしたが、ユトラボさんや公民館の方々は卒業後のことを語ってくれて大きな気づきになりました。**生徒たちに生きる力をつけたいと考えてきましたが、それは働く力だけではなく、余暇や生活の時間も含めて地域とのつながりのなかで基盤となる関係性や、自分の居場所を見つけることなのだ。**ユトラボさんのサードプレイスのイベントに生徒が参加して小さな実体験を積むだけでも、学校や家庭以外にも地域に居場所があることに生徒たちが気づく種まきになっています。

石川 益養の卒業生が将来の地域の創り手になることは間違いありません。地域連携セクションが復活したことによって、地域での益養の存在感が確実に大きくなっていると感じます。

多様な組織間の連携の秘訣は？

——教育委員会や学校が、地域や外部の組織の人々とつながりをもち、継続させていくために留意すべきはどんなことでしょうか？

桐 地域連携するときに間に入ってくれる中間支援団体や公民館などの存在が非常に重要と認識することです。教育機関は生徒の成長を第一に考えますが、関わってくれる大人のメリットも考えなければうまくいきません。いかに同じビジョンを描くことができるか、**中間支援団体が教育機関と地域の想いをうまく翻訳して結んでくれると実感しています。**

檜垣 中間支援団体の立場からすると、団体の入れ方に注意が必要です。相手方の立場がわかる人の配置が重要で、ユタラボでは教育経験者や公民館経験者を採用しています。経験者を増やすために教育機関、民間、地域間での派遣制度など人材交流をもっと増やした方がいいと考えています。

石川 **お互いを知ろうとすること、自分の想いを伝えることが大事です。**西益田では、小中学校の全教職員と地域の人々、子どもたちの代表、コーディネーターなどが集まる「WITHの会」という会議を年1回やっています。この会は子どもたちがやりたいことを言えて叶える場です。全教職員が子どもの想い

を共有できる場になっています。

廣田 大人のメリットで言うと、地域連携が盛んだった前任校では、当初は地域の方が無償で協力してくれていましたが、無償だと継続しません。**生徒と学校と地域のWin-Winの関係が大事。**大人も楽しめて、交通費くらいは提供しないと次につながりません。外部の他業種の方々は教員がもっていないマインドで子どもたちの視野を広げてくれる存在で、外の方に入ってもらった方が確実に教育のバランスがよくなりますから、その方々が生徒と関わって良かったと思ってもらえる仕掛けや配慮も必要だと思います。

また、自分の譲れないことははっきりとお互いに伝えることも大事。私も檜垣さんにはそれを伝えています。

檜垣 異なる立場同士の協働は簡単ではありません。それには時間も必要で、益田では10年間の活動の蓄積のなかでの信頼関係の連鎖ができあがっています。我々のような中間支援団体ではない一般の方で“コーディネーター的”な動きができる市民が続出してきただけでも、益田での異業種連携がうまく回っている一因だと思います。

益田市はどう変わったのか？

——益田市のように学校を開き、地域と連携することで、生徒たちと地域の変化を皆さんはどう感じていらっしゃいますか？

中島 翔陽では1・2年次に「いろんな人とつながって、失敗も経験しておいで」と生徒を外に出すと、いろんなことに挑戦して地域の人にほめられて、次に動く力になっています。それが実を結ぶのが3年生です。総合型選抜の受験者の面談などを通して、さらに伸びていく子もいる。地域での活動が当たり前になっているせいか、それが受験のアピールポイントになると自覚しておらず、教員から「すごいね!」など声かけすることで気づきになることも多いです。地域活動で成功体験を積んだ卒業生たちが、「産業社会と人間」の授業のロールモデルとなって自主的に後輩に教えに来てくれることも多々あります。

廣田 うらやましいですね。益高では総合型

選抜が増えるなど少しずつ変化はあるものの、進学校としてのジレンマは探究の発表がある3年生の6月が過ぎると受験モードに入って、それまでの地域の学びがほやけていってしまう生徒もいることです。翔陽のように深掘りした探究にしていけることがこれからの課題です。

檜垣 客観的には、益高で充実した探究活動ができた生徒は、それが将来の夢や受験のモチベーションになっていることも多いと感じています。

三宅 益養は今、地域とつながる基盤ができてつつある段階です。本校の生徒たちは自尊感情が低かったり、学校外の経験値が圧倒的に少なかったのですが、学校外でイベントに参加したり、製品販売のボランティアをする高等部の生徒が増え始めています。地域との関わりのなかで少しずつ成功体験を重ねていることが見て取れるようになってきました。

学校と地域の連携継続には、
大人もメリットがある
Win-Winの関係が重要。



廣田先生

生徒たちにとって地域が身近な存在になり、「してもらう」ことが多かった生徒たちが「する側」になってきている。地域の方の反応を石川さんがフィードバックしてくれることもとてもありがたいですね。それが教員も生徒も次の挑戦へのモチベーションになっています。

檜垣 大学進学などで一度県外に出ても、その後に前向きに益田に戻ってくる若者が増えています。若者が地元に戻ってくるときに必要なのは、何かができる・できないは関係なく、ありのままの自分を受けて入れてくれる存在の数の多さだと思います。資本主義社会の原理で測られがちな相対的な物差しではなく、ありのままの自分を、親以外でどれだけの人が受け入れてくれるか。益田はその存在が圧倒的に多く、それがライフキャリア教育での大人の変化だと思います。

桐 益田の里帰りは家という建物や実家だけではなく「人に帰ってくる」イメージです。それは10年間の取組で、大人と子どもが学校以外の場所でもたくさんの共通体験を積んできたから。子どもとの関わりに、大人も参加して良かったと普通に言ってもらえる土壤ができ

てきました。

石川 翔陽の卒業生で「地域活動をしたいから土日が休みの会社に就職した」という子がいます。理由を聞いたら「子どもたちの“やりたい”を叶える大人になりたいから」と。ライフキャリア教育で受けたロールモデルの循環が実っていると感じました。

——最後に、地域連携についての皆さんの想いをひと言ずつお願いします。

三宅 地域の方々とつながると自分自身が楽しいのです。世界が広がって一人の人間として、人と人との関係性が豊かになっていると実感しています。

石川 子どもが変わると大人が変わり、大人が変わると地域が変わります。その中の一員でいられることがとてもありがたいです。人同士の関係性が深くなったことで「安心できるまちになった」という大人もいます。そういう夢や希望を子どもたちの姿を通して見られているのは、地域にとっても素敵なことだと思います。

檜垣 やはり10年という継続と積み重ねが大事だと思います。振り返って1年目の自分に言いたいことは「闘うな」ということ。施策を



檜垣さん

益田には若者たちの
「ありのまま」を受け入れる
存在が圧倒的に多い。

学校外で生徒が主体的に地域と連携

公民館・学校外活動

公民館を「ひとづくり」の拠点と再定義したことから、生徒たちが学校活動とは別に自発的にやりたいことを、公民館を利用して活発に行っている。石川さんのような公民館の主事たちが相談役となり、最適な人とつなげたり、場所を提供したりしている。例えば、地元愛の強い高校生が探究活動の延長として、地域の自治組織の会合で、空き家についてのワークショップを行ったり（写真上）、中学生に家庭・学校以外のサードプレイスを提供し、中高生のつながりをつくりたいという思いから高校生が企画したマシュマロトークという対話イベント（写真下）などが実施されてきた。



通したくて周りと軋轢が生じていたこともあります。今思えば時と相手を間違えていた。チャレンジする際にタイミングとパートナーを見極めることも大事ですね。

中島 地域とつながることは、事前は不安でしたが、百聞は一見にしかずです。つながってみると生徒にできそうなことがどんどん具体的に想像できて実現できました。とにかく「行って、会って、やってみる」ことです。やってみると次につながっていきます。

廣田 地域とつながって偏りのない幅広い教育を行うことが、子どもたちの学びを深め、それが子どもたちの幸せにつながっていくと感じています。

桐 子どもを育てるのは教員だけの仕事ではなく、教員が思うよりたくさんの方が協力してくれます。面白がって子どもと関わってくれる人がいると、中島先生がおっしゃっていたように周りに伝播してつながってうまく回るようになります。それが子どもたちのため、ひいては自分も含めた大人のためになります。

子どもが変わると大人も変わり、
大人が変わると地域が変わり、
安心できるまちになる。



石川さん

ライフキャリア教育を体験した卒業生の声

2015年から市が実践してきた「ライフキャリア教育」を受け、学校内外で地域活動を経験した卒業生である大学生と社会人に、経験で得たこと、地域への想いを語ってもらいました。



益田は地域全体が「実家のようなまち」

島田郁子さん

市立吉田小学校→市立益田中学校→県立益田高校卒
島根大学 法文学部 社会文化学科在学中



周りから引かれるくらい益田が大好き（笑）。自然がたくさんあるし、何より人とのつながりが広くて濃い。自分の成長を見てくれていた大人がたくさんいるので、帰るたびにまち全体が実家のよう

なんです。高校時代には自由参加の小学生対象の「対話プラス」に全15校中13校も参加しました。また、高校の課題研究をきっかけにジェンダーに興味をもち、授業とは別に個人でも活動を始めました。考えを深めるためにほかの人の意見を聞くイベントを開催したときに（写真）、探究担当の先生やユタラボの方が伴走してくれました。その経験を活かして総合型選抜で島根大学に合格。現在は大学でジェンダー論について学ぶなかで、ジェンダーは早期教育が必要だと思えるようになり、将来は教員や子どもと関わる仕事を益田でできたらいいなと思いながら、教職課程でも学んでいます。



自分が地域のロールモデルの一員と自覚

小野涼太さん

市立豊川小学校→市立益田東中学校→県立益田高校→大正大学卒
現在は益田市でマルチワークで活躍中



中学時代に仲間と地域のお手伝いなどの活動をしていて、自分を受け入れてくれて居心地が良い地域が好きになり、将来は地域に貢献できる人になりたいと考えていました。目先の勉強が大変で進

路について考える余裕がなかった高校時代には、「対話プラス」の授業で地域の方と話したことが立ち止まって将来を考えるきっかけに。自分も貢献したいと小学生と話す役割も買って出ました（写真）。活動の中で出会った地域のさまざまな大人に刺激を受け、大学は東京に出て地域創生を学びましたが、その間も「いつでも帰ってきていい」という地域の温かさを感じていました。卒業後は益田に戻り、現在、ユタラボと保育園でマルチワークしています。保育園では自分がロールモデルになっていることを体感。子どもたちに恥ずかしくない生き方をしなければと日々感じています。